

実習事後指導に関する一考察

山田秀江*

A Study of Post-Guidance to Practice Teaching in Child Care and Education

Hidemi Yamada

本研究では有効な実習の事後指導について実践を通して検証した。実習自己課題を実習前に設定し、実習後にふりかえるという作業を保育実習Ⅰ、教育実習、保育実習Ⅱと繰り返し行い、それを記録として残し実習個人カルテを作成した。

その結果、実践的な学びを深めるための実習事後指導として、実習個人カルテ作成の取り組みは有効であることがわかった。

Key words: 実習事後指導 実習自己課題、実習個人カルテ

第1章 問題と目的

1. 実践をふりかえることの意義

反省的实践家としての保育者の専門性について近年よく論じられている。2007年度の保育士養成協議会専門員研究では、実習を通して体験をふりかえり、省察する事の重要性を説いている。実践を通して自己を振り返り、反省点や自己課題を見つけ、さらなる実践につなげていくということの重要性を強調されたように思う。

保育者養成の中では特に実習事後指導においてこの反省的实践家としての基礎を養う役目があると思われる。

学生は実習を通して日々多様な体験をする。その時々には余裕なく精一杯の状態なので意識せず様々なかかわりをしている。「どうしてそのかかわりをしたのか」「子どもにとって良いかかわりだったのか」などと後で反省する行為がなければ、その経験は意識化されず学生の頭の中で素通りしてしまい、学びにつながらない。岡本（2007）も指摘しているように、学生は自らの実習を客観的にふりかえり、内省することもないまま、漠然と「楽しかった」「楽しくなかった」と感覚的に捉えてし

まう傾向があるように感じている。実習で体験したことを客観的な目で反省することなしに実習での真の学びはないといっても過言ではない。

ある学生に実習中に心に残った体験を尋ねた。すると以下のような内容で5歳児の子どもとかかわった経験を話してくれた。

「友達とうまくかかわれず一人で遊んでいたA児に遊びに誘われたので一緒に遊ぶことになった。実習生が遊びを提案し、それを行っていると、数人の子どもたちが寄ってきて、遊びに入れてほしいと言った。A児は喜んで遊びに入れ、実習生と友達数人と楽しく遊ぶことができた。A児がとても楽しそうだったので、実習生自身も嬉しかった。」ということである。

学生にとっては何気ない実習の場面であり、楽しかった実習の思い出として残っているだけであった。

そこで、友達とのつながりが重要な時期である5歳児の発達段階からA児の気持ちの読み取りと実習生として何を願い、かかわったのかということ、さらに5歳児の発達段階に応じた遊びの投げかけなど1つ1つ考察する作業を一緒に行った。

具体的に一つ一つの現象の解釈を考察していくことで、体験の意味が明確になり、実践知として身につけることができたようである。その数日後、学生が体験をふりかえり考察することで自分のか

* 四條畷学園短期大学 保育学科

かわり方や遊びの提案が適切であったこと、今後の実践への学びになったことを改めて認識することができたと話してくれ、体験のふりかえりが非常に有意義であったと実感したようであった。

2. 本研究の目的

実習事後に行うふりかえりは実習での体験をその後の学びにつなげるために非常に重要なことであることは明白である。しかし、私自身実習指導担当として、これまで特に事前指導に力点を置いてきたことは否めない。

事後指導についてはミニマムスタンダードに基づき、全体反省会や自己評価と実習先の評価の比較とそのずれを考えることなど行ってきたが、どうも上滑りなものになってしまっており、十分なものではなかったように反省している。

また、幼稚園免許と保育士を取得希望の学生は保育実習、教育実習と合わせて4つの実習を経験する。その一つ一つの実習がバラバラで、一つ実習が終わればまた新たに次の実習に臨むという感じの取り組みであった。実習間のつながりや学びの蓄積ができていなかったと感じている。

そこで本研究では、学生の学びが深まるような事後指導について今までの事後指導実践をふりかえりながら考察し、2年間の実習を通して学生に有効な実習指導について追究したいと考える。

第2章 実習事後指導の実践

1. 実習事後指導の内容・計画

実習事後指導として、①実習事後レポート②実習アンケート③実習全体反省会④個別指導⑤実習後の自己評価と実習先評価の開示⑥実習個人カルテ作成を行った。

以上の事後指導の中で「ふりかえり」を中心に行った指導内容である①実習事後レポートとその分析から導き出した指導方法である⑥実習個人カルテ作成について考察する。

(1) 実習事後レポート

2009年9月に実施した保育実習Ⅰ（保育所）を

終了した学生に実習事後レポートを課題として提出させた。

その内容は、まず自己評価項目として実習態度について実習テキストを参照し「遅刻、欠席はなかったか」「体調管理はできたか」「明るくだれにでもあいさつできたか、返事はどうだったか」等11項目を決定した。それぞれに○、△、×の3段階評価でのふりかえりを行わせた。

さらに、「子どもたちとかかわって気づいたこと」「先輩保育者から学んだこと」等、ふりかえる視点を11項目挙げ、それぞれについての反省を2～3行の短文で記述させるようにした。

その中の1つの項目である「実習テーマ（課題）とそれについて達成できたかどうか」を取り上げ、実習の自己課題設定とその課題についてのふりかえりができているかどうかを見た。

その結果、2009年9月に保育実習に参加した本学1年生（12月・3月に実習を行った1年生は除く）75名中、達成出来た学生52名、どちらともいえない学生14名、達成できなかった学生9名であった。7割弱の学生が自分の実習課題に対して達成できたという前向きな結果をだしている。

こうして、自己課題をふりかえることはただ単に楽しかったかどうかでしか実習を受け止められない学生に対して、一つの視点をもって実習をふりかえり、省察することができる手立てとなる。

しかし、1年生前期の実習事前指導を中心にした専門科目の授業内容と一日観察参加実習の体験という限られた学びの中で、実習自己課題を決めるというのは大変難しいことであり、指導する側にとっても大きな課題である。今回の課題の中身を見てみると複数回答ではあるが、「積極的にかかわる」が33名と一番多く、「保育者を観察し、援助や言葉がけを理解する」18名、「子どもを理解する（発達段階など）」17名「一日の生活の流れを理解する」17名「子どもへの適切な援助」7名と続いている。これらの課題は保育技術に関することや実習態度に関する内容など様々で、難易度も様々であることから、一般的な実習課題を保育技術と実習態度に整理して提示し、学生が各自の特性や興味を活かした課題設定ができるよう指導する必要があると感じた。

さらに実践的反省家として成長していくには課題をもって実習に臨みそれをふりかえる、そして

それに基づいて次の実習への課題を考え、実習に臨むというサイクルを辿ることが重要であると考ええる。

そのため、2年間に亘る保育実習、教育実習を通して課題設定とふりかえりを繰り返し行い、それを実習個人カルテとして残していく取り組みを行うことにした。

(2) 実習個人カルテ

① 実習個人カルテの内容

実習個人カルテの内容は表1の5項目に関して自由記述をさせた。(達成できたかどうかはどちらかを選択させた。)

表1. 実習個人カルテ 5つの項目

①	実習自己課題
②	自己課題は達成できたかどうかとその理由
③	ふりかえりを踏まえて、次の実習自己課題(a.b)
a	実習態度に関する課題
b	保育内容・保育技術に関する課題
④	自己課題を達成するために次の実習までに努力することがら

② 実施時期

各実習事前指導で自己課題を設定し、実習後に達成できたかどうかふりかえりを行った。各実習の時期は表2のとおりである。(ただし、入学後もない1年次7月の観察参加実習後には行っていない。)

表2. 実習時期(保育所以外の施設実習は除く)

1年次7月	保育所観察参加実習(1日)
1年次9月	保育実習Ⅰ(保育所)(11日)
2年次5月	幼稚園 観察実習(半日)
2年次9月	教育実習(20日間)
2年次12月	保育実習Ⅱ(11日)

② 対象者

対象の学生は2009年度入学生で保育士と幼稚園教諭免許状取得のために教育実習と保育実習(保育所)、保育実習Ⅱを履修した学生49名とする。(保育実習Ⅲに参加した学生等は除く)

③ 保育実習特後の結果と考察

1年次9月の保育実習自己課題について自由記述させたものを項目別に分類した結果を表3に示す。

課題の数は自由とし、複数の課題を設定している学生もいた。

表3. 保育実習Ⅰ 自己課題と人数(複数回答)・%(/49人)

①	実習態度	27人	55%
②	保育者の援助	19人	39%
③	保育所の一日の流れ	11人	22%
④	子ども理解	10人	20%
⑤	保護者との連携	2人	4%
⑥	責任実習における保育技術	1人	2%
⑦	環境構成	1人	2%
	延べ人数	71人	

課題の達成度は40名(82%)の学生が達成できたと回答し、9名(18%)の学生が達成できなかったと回答した。

実習自己課題の内容をみると実習態度に関する課題をもったものが多い。「積極的に行動する」「笑顔で子どもたちと接する」などである。初めての本格的な実習で、まずは精一杯頑張りたいという意欲の表れである。反面、具体的に課題をイメージできないのでまずは自分の実習に臨む態度を課題にしたという学生も多いように感じた。この課題をもった学生を個別にみても、特に消極的な学生ということではなく、漠然とした考えでこの課題を設定しているように思えた。

次に保育者の援助に関する課題、保育所の一日の流れ、子ども理解と続いている。今まで、じっくり観察した経験がない実際の保育者の声掛けや援助、また初めて長期間保育所に入る学生もあり、子どもたちは一日どのように過ごしていて、保育者はどのように接しているのかという基礎的な課題を持つ学生が多いことがわかる。

課題の達成度は82%と多くの学生が達成したと感じており、その理由をみると、少しでも保育者の援助や子どもの発達(できること)などを観察できただけで、新鮮な感動とともに、達成できたと感じているようであった。

課題設定の未熟さはあるものの、実習後に自己課題をふりかえるということは、学生にとって一つの視点で保育を考えることができ、漠然と楽しかった経験ではなく、反省と次への課題につながるものがうかがえた。また、指導する側としても学生の保育についての理解度や実習での学びの深さなどを知る手掛かりになることがわかった。

④ 教育実習後の結果と考察

2 年次 9 月の教育実習自己課題について自由記述させたものを項目別に分類した結果を表 4 に示す。課題の数は自由とし、複数の課題を設定している学生が多かった。

表4. 教育実習 自己課題と人数(複数回答)・%(/49 人)

②	保育者の援助	25 人	51%
①	実習態度	21 人	43%
④	子ども理解	20 人	41%
⑤	責任実習における保育技術	17 人	35%
⑧	幼保の違い	7 人	14%
⑦	環境構成	3 人	6%
⑤	保護者との連携	2 人	4%
⑨	その他	1 人	2%
	延べ人数	96 人	

課題の達成度は 38 名(78%)の学生が達成できたと回答し、7 名(14%)の学生が達成できなかったと回答した。どちらともいえないという回答が 4 名(8%)あった。

実習自己課題の内容をみると保育者の援助を課題にしている学生が半数と一番多かった。保育実習Ⅰで保育者の熟練した援助等を観察し、未熟な自分に気づき、課題が明確になる学生が多かった。

学生が記述した内容を見ると、保育者の援助という抽象的な記述は少なく、「場面に応じた保育者の言葉がけ(乳児の場合との比較)」「発達段階に応じた自立への援助」「子ども一人ひとりに応じた援助の在り方」「トラブルの際の保育者の対応と子どもの変化」など非常に具体的な課題となっていた。さらにその課題を設定した理由も明確であった。

次に実習態度についての課題が多かったが、こちらも笑顔で接することの重要性や積極的にかかわることの難しさなどを実感し、うまくできない自分を反省した結果、このような課題をもつ学生が多かった。

また、保育実習Ⅰと違い、責任実習における保育技術という自己課題をもった学生が 35%に増えていた。やはり教育実習では一斉指導として設定保育をすることが課題であり、初めて取り組む学生も少なくないので、不安とともに大きな課題となったようである。

これらの自己課題について学生の記述をみると、保育実習Ⅰで体験したことを実習後のふりかえりが自己課題設定に活かされているのは明白

である。

実習の記憶が新しい実習直後にふりかえりを行い、それを文章として残すことで、次の実習直前にもう一度ふりかえることができる。そのことで、保育実習Ⅰの状況や課題が鮮明に思い出され、明確な課題設定へとつながっているのがわかった。

課題の達成については 8 割弱の学生が達成できたと回答しており、前向きな自己評価になっている。保育実習Ⅰより課題が具体的で明確になったぶん、意識しやすくなり達成感もあったようだが、まだまだ浅いレベルでの達成度だと思われる。

⑥ 保育実習Ⅱ後の結果と考察

2 年次 12 月の保育実習Ⅱ自己課題について自由記述させたものを項目別に分類した結果を表 5 に示す。課題の数は自由とし、複数の課題を設定している学生が多かった。

表5. 保育実習Ⅱ 自己課題と人数(複数回答)・%(/49 人)

②	保育者の援助	33 人	67%
③	子ども理解	23 人	47%
①	実習態度	19 人	39%
⑥	責任実習における保育技術	16 人	33%
⑦	環境構成	9 人	18%
⑤	保護者との連携	6 人	12%
	延べ人数	106 人	

課題の達成度は 37 名(76%)の学生が達成できたと回答し、6 名(12%)の学生が達成できなかったと回答した。どちらともいえないという回答が 6 名(12%)あった。

実習自己課題の内容をみると保育者の援助が 67%と多くなっている。学生が記述した内容を見ると「乳児の個人差とそれに応じた対応」「0 歳児への声かけと援助」など乳児保育に関する援助内容についての課題が多かった。保育所と幼稚園の両方の実習を経験し、幼保の違いを知ることができた学生は、最後の保育実習では、保育所でしか学べない乳児保育について特に関心を持ち、自分から乳児クラスでの実習を希望し課題を持つ学生が多かった。

また、「今後自分が保育者として働くときに参考となるよう保育者はどのようなことまで援助しているか観察する」など次年度の 4 月から保育者として現場に立つことを意識し、少しでも多くのことを得たいと食欲に実習に臨む姿が課題からうかがえた。

次に子ども理解を課題にした学生が多かった。「子ども一人ひとりの発達段階の違い」「子どもの仲間関係の築き方」「男女の行動や遊びの違い」など子どもをより深く理解したいという思いがうかがえた。保育は子ども理解から始まるということを知識としてではなく今までの実習を通して理解し、課題としたことがわかった。

これら課題をみてもみると、今までの実習での経験とそのふりかえりが土台になっていることがうかがえ、課題がより具体的になり、それぞれの学生の個性や興味を活かした課題になっていることもわかった。

課題の達成については教育実習と近い76%の学生が達成できたと回答しており、前向きな自己評価になっている。保育実習Ⅱに関しては自己課題研究として、課題をもった内容に関して、実習を通して実際に観察したことや自分が体験したことをエピソードとして2～3事例書かせて、それぞれについて課題の視点で考察をし、まとめとして課題に関して自分なりに導いた答えや学んだことを論述させるレポートを提出させた。

このレポートの詳細についてはここでは省略するが、各学生が保育について深く学んでいることがよくわかった。

⑦ 保育実習Ⅰ、教育実習、保育実習Ⅱの課題比較

保育実習Ⅰ、教育実習、保育実習Ⅱの課題の延べ人数を比較すると、保育実習Ⅰでは71人、教育実習では96人、保育実習Ⅱでは106人と課題をもった人数が増えていることがわかる。平均で保育実習Ⅰでは1.4個、教育実習では2.0個、保育実習Ⅱでは2.2個の課題を一人の学生がもっていることになり、順に増えていることがわかる。個人でみると保育実習Ⅱでは最大4つの課題をもった学生がいた。

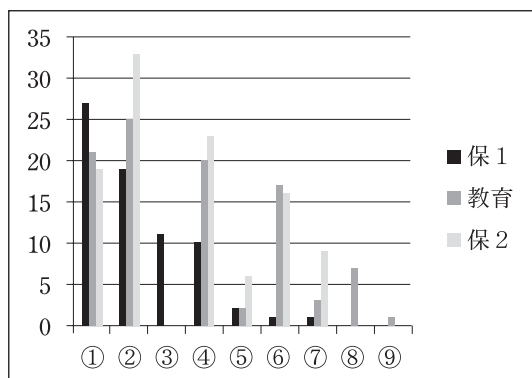


図1 自己課題項目別人数

実習を終えるたびに自己課題についての視野が広がり、二つ以上の課題を意識して次の実習に取り組むことができるようになっていくのがわかる。項目別に比較するため、図1に項目別の人数グラフを示す。(横軸の項目の数字①～⑨は表3.4.5と同じもの。縦軸は人数)

これを見ると、実習態度が順に減っていき、保育者の援助、子ども理解が増えていくのがわかる。また、責任実習における保育技術は教育実習、保育実習Ⅱでは増えており、設定保育や部分実習など子ども集団に働きかけ指導することが、学生にとって大きな課題であることがわかる。さらに保育実習Ⅱでは環境構成や保護者との連携を課題にする学生も増えている。

初めての实習では保育現場を知らないで課題が明確に持てず、実習態度や一日の流れといった基本的な課題が多いが、教育実習では保育実習での経験やふりかえりを活かしより具体的にレベルアップした課題設定となっている。さらに保育実習Ⅱでは学生最後のまとめの実習として、将来のことも意識しながら課題を設定し実習に取り組んでおり、各実習の段階に応じて自己課題を設定し、レベルアップしていることがうかがえる。

⑧ 保育者になってからの自己課題

2年次12月の保育実習Ⅱのふりかえり後に自分が保育者になった時の自己課題について自由記述させた。

それを項目別に分類した結果を表6に示す。課題の数は自由とし、複数の課題を設定している学生もいた。

表6. 保育者自己課題と人数(複数回答)・%(/49人)

⑥	保育技術	29人	59%
①	態度	21人	43%
④	子ども理解	11人	22%
②	援助	9人	18%
⑤	保護者との連携	5人	10%
⑦	環境構成	3人	6%
	延べ人数	78人	

保育技術を課題に挙げている学生が一番多く、課題内容の詳細をみると「体を動かす楽しみを伝えられるようリトミックなどピアノを使った保育をする」「保育技術の向上を常に心がける」「全体を把握して保育する」など子どもたちの生活や活

動が充実するように、ピアノや話し方、指導方法など自分の保育技術を高めたいという課題が多かった。保育技術を高めることは保育者として重要なことであると実習を通じて認識し、保育のプロとして技術を向上させたいという気持ちをもっていることがうかがえる。

次に保育者としての態度を挙げている学生が多い。「笑顔で明るく積極的に接する」「責任を持って行動する」「いつも笑顔で子どもが安心できる居場所になる」など保育者としての基本的な態度や姿勢がいかに重要かを実感し、子どもが安心してかわれる存在になりたいという気持ちをもっていることがわかった。

次に、子ども理解、援助と続いているが、「子ども一人一人に応じた援助」「子どもの気持ちに常に寄り添いかかわる」など子どもの最善の利益を考え、子どもの願いや思いを理解し保育者として適切にかかわっていききたいという気持ちがうかがえた。

⑨ 各学生の課題内容

保育実習Ⅰ、教育実習、保育実習Ⅱと同じ課題項目で課題設定をした学生が17人いた。また、教育実習、保育実習Ⅱと同じ課題項目で課題設定した学生が22人いた。合わせると39人、全体の80%の学生が課題を継続して取り組んでいることがわかった。

同じ項目の課題を設定しているということは前の実習で反省したことや課題に感じたことを自己課題として継続してもち、より学びを深めていこうと考え実習に臨む学生が多いということである。

保育実習Ⅰ、教育実習、保育実習Ⅱともに子ども理解という課題項目で課題設定した学生をみると、保育実習Ⅰでは「子ども一人一人のことを知る」、教育実習では「子どもの遊びについて深める」となり、保育実習Ⅱでは「子どもの仲間意識の芽生えについて知る」と変化している。子どもを理解するという漠然とした課題ではなく、子どもの何を理解したいのか、保育をする上で必要な子ども理解のあり方や自分が知りたい子どもの発達についての理解という実践研究の視点をもって実習に臨んでいることがわかった。また、ある学生は3つの実習ともに「子どもの発達に応じた援助」と「保護者とのコミュニケーションの取り方」について

課題を持ち続け、保育所と幼稚園の違いや担当年齢の違いによって子どもへの援助や保護者とのかわりがどのように変わってくるのかという問題意識をもって実習に臨んでいた。

このように課題を継続的に設定し、ふりかえりを行うことはそれぞれの学生が主体的に課題に取り組み、保育者としての成長を支えるものであるといえる。

第3章 まとめ

1. 実習事後指導のあり方を考える

これまでそれぞれの実習ごとに行ってきた、実習課題設定や実習後の反省レポートなどの事後指導を、本研究では各実習間のつながりをもって行い、実習の学びを積み上げていく取り組みとして実習個人カルテ作成を行った。

保育実習Ⅰでは保育現場についてまだよくわからない学生が前期の授業や観察実習での経験に基づいて課題を設定しているので、抽象的な課題となっていた。それでも実習後にその課題をふりかえることで、ただ漠然と楽しかった実習というとならではなく経験を通して学んだこと、身につけたことなど保育についての理解が深まることがわかった。一つの視点をもってふりかえることの重要性を感じた。

次に教育実習では実習個人カルテに記録していた前実習の課題とふりかえりに基づいて自己課題を設定しており、その課題設定には明確な根拠や意図がある。前実習での経験やふりかえりを活かし、明確な自己課題をもって実習に臨むことで、今まで何気なく見過ごしてきたことが、学生のアンテナにかかり、新たな認識や理解を得ることができたようである。さらにそれを実習後にふりかえることでより深い学びにつながっていた。

保育実習Ⅱでも同様にこれまでの実習で得たものに基づいて課題を設定し、実習に臨んでいた。学生として最後の実習で4月から保育者として働くということも意識して、できるだけ多くのことを吸収したいと考える学生がおり、今までの実習の集大成として明確な自己課題をもち実習に臨んでいた。

このような実習個人カルテの取り組みは、今ま

で実習で積み重ねてきた自己課題と達成度を常に可視化し、ふりかえりを土台に次の新たな課題を考えることができ保育を学ぶ視点が絞られていくことがわかった。

また、学生一人一人の課題を2年間に亘って見ることで学生自身が実習を通して得た失敗体験や感動体験から自分の課題を客観的に見つめることができ、自分自身の成長を実感していることがわかった。

さらに、私自身が実習指導者として学生の学びや躓きを知ることができ、実習指導に役立たせることもできた。

実習での学びは実習後に視点をもってふりかえることで明確になる。実習体験をふりかえり文章に書くなど言語化することで新たな気づきがあり、次の実習への課題とつながっていく。その繰り返しは保育についての深い理解となる。

こうして体得したことは自然に、無意識的に保育の中で活かされると考えられる。常に課題を持ち、実践しふりかえるというサイクルを繰り返すことで反省的实践家としての基礎を培うことができると考えられ、実習個人カルテの取り組みは有効な実習事後指導であることが検証された。

2. 今後の課題

今回の研究では実習個人カルテの実習自己課題について取り上げたが、実習個人カルテの中に本学で使用している実習評価票を用いての自己評価や実習先の評価開示、その誤差についての感想なども取り入れている。そこで、自己評価、他者評価も含めて客観的に実習での学びを蓄積できるような実習個人カルテの作成を今後は試みたいと考えている。

さらに、実習自己課題におけるエピソード研究や実践研究なども実施しているので、総合的な実習事後指導のあり方についてさらに追究していきたいと考えている。

引用・参考文献

- ・社団法人全国保育士養成協議会 専門委員会平成19年度課題研究(2008)『保育士養成資料集 第48号』「保育士養成システムのパラダイム転換Ⅲ-成長し続けるために養成校でおさえておきたいこと-」123

- ・岡本雅子(2007)「保育実習・事前事後指導の一考察:社会的スキルの視点から」関西女子短期大学紀要16, 21-30
- ・山田秀江(2010)「学びを深める保育実習事後指導について」日本保育学会第63回大会発表要旨集 577
- ・山田秀江(2010)「学びを深める保育実習事後指導についてⅡ-実習個人カルテ作成の試み-」全国保育士養成協議会第49回研究大会 研究発表論文集 208-209

— 2011.3.30 受稿、2011.3.31 受理 —